第七節　札幌農學校々有財産

の歴史を同うせざるより來るもの、亦如何ともするべきなく、然るに獨り札幌農學校に於ては、幸に學田地を得らるゝの境遇にありたるを以て、自ら歐米の美風に倣ひ、茲に校有財産を以て、純然たる學校維持資金を成さんとするに至れり、是れ誠に蕞爾たる、北陬の一農學校の偶然にも、全國の諸學校に率先して、好例を垂るゝものと謂ふべく、以て自ら驕るに足るべし、蓋し其此に至りたる迄の當局者經營慘憺の狀は、洵に筆紙の能く盡す所にあらざるなり。

札幌農學校々有財産總價格は、今日の時價を以て畧弍百萬圓（動物農具等所謂廣義の流通資本を除く）に達し、年々の實收入三萬餘圓あり、以上に其大數を示すに過ぎざれ共、尚ほ現今の校有財産を改良するときは今日より十年の後に至らば、其の收入十萬餘圓に昇り、以て裕に一校維持費を支ふるに足るべく、是に至りて、札幌農學校は始めて獨立獨歩、更に國庫の補助を仰ぐの要なきに至るべし、斯の如きは、實に唯に一校の榮譽のみならず、大にしては、國家の爲め悅ぶべきの事となす。

今次に大體其の財産部類に從ひ、數字を示し、且つ説明を加へんとす。

（第一）土地＝總面積一千八百九十六萬七千七百七十九坪七合六夕

内譯

本校敷地は札幌北一條にあり、地積一萬三千六百二十四坪とす、而して附屬官舍敷地は總て三千六百坪となす、其他植物園の敷地、札幌北二條より四條に跨り三萬四千八百〇二坪七合一夕とし、宅地及び道路敷地は札幌北七條より十五條に及び總て十一萬六千〇三十九坪七合七夕一才あり。

附屬學田地農場は實に八ヶ所に散じ、其總地は一千七百六十一萬三千三百五十三坪六合五夕、即ち五千十一町一反一畝餘の大地積にて、大約方十三里に相當すべし、其内

（第一）耕農地第一農場は札幌區郡にあり、專ら學生生徒の實習並に各種の試驗場に充てらるるものにて、其地積二十七萬九千〇三十六坪一合二夕あり、其他牛馬羊豕兎鶏鷄等の家畜家禽數百を蓄ふ、皆試驗用又は經濟用なりとす。

第二農場も亦札幌區郡にあり、歐米の農業法に則り牧畜耕作の業を專らとし、北海道に於ける大農の適否如何を極め、本道農界の摸範となせり、總地積三十七萬八千三百十一坪二合二夕九才、家畜家禽亦各百を以て數へ、其收入鮮少ならず。

第七節　札幌農學校々有財産

第三、第四第五、第六、第七、第八、農場は、本校を距ること近くは二三里遠くは數十里外に在り、現今小作農業者を容れ、農場規定により開墾中のものにかゝれり、中には其大半を成功せるものあり、又僅に緒に就けるものあり、共に其各地方の、模範農場を開始する見込にして、今日多少の收入あるものあり、又却て資金注入中の者あり、何れも農場經營、實習の爲め學生を派遣指導する所とす、其位置及び地積は、第三、石狩國札幌郡札幌村(九十五萬三千二百四十二坪)第四札幌平岸村(百九十四萬二千八百四十二坪)、第五、夕張郡角田村(百五十二萬坪)第六、夕張郡登川村(二百十四萬二千坪)第七、渡島國龜田郡大中山村(十七萬三千六百八十二坪五合三夕)、第八、石狩フラヌ(千百四十一萬二千三百九十九坪四合)となす。

(第二)基本林地＝基本林地は二ヶ所にありて生徒の實地演習林たり、其位置及び地積は第一石狩國雨龍郡深川村(三十萬町歩)第二天鹽國中川郡(廿萬町歩)となす。

(第三)建物＝建物は本校建坪一千百七十八坪七合二夕九才、之に植物園及び博物館建坪百八十六坪一合一夕、農場建坪二千六百二十八坪六合二夕を合して、總て三千百九十四坪九合六夕、

(第四)有價證券＝本校所有の有價證券は金額一萬八千八百十六圓なりとす。

以上說述する如く、實に札幌農學校々有財産は意外なる巨額に上れるものにして、爾後益々增加するのみにして、決して減するとあらず、是より彌々學校の熾盛期して俟つべき者あり、我輩は財産の節を結ぶに當り、本校出身者の組織せる同窓會なるものは、學校百年の計を早く立て、世の物議を排して、多年辛苦農場を開き、既に成るの曉に及び、擧げて札幌農學校に寄附し我校基本財産に充てんとを請て、以て今日に臻るもの、即ち學校が同窓會員に負ふ所多きを感銘して止まずと云爾。

第四章　結論

北海道帝國大學設立の必要を論ず

生物進化の大勢は顯然として蓋ふべからず、社會は一種の有機體なり、十九世紀の文明は古來世界文明史が未だ嘗て達する能はざりし頂點を窮めたりき、而かも一面より之を觀察すれば、個人自由の渴望に始まり、國際的生存競爭に終りたりと言はざるべからず。曉鐘一度響きて二十世紀の日は明く、世界の舞臺は舊世紀を伴ふて一轉し去り、文明は新舞臺に立ちて、將さに大に活動せんとす、而して文明活動の日は、平和的生存競爭の最も激烈なるの秋なりと雖も、其爲す所は必ずしも善ならざるが故に、或は合し、或は離れ、朝贊暮否も啻ならず、遂に仇と呼び、敵と叫ぶ、斯くして人類の平和は戰爭を盡滅する能はず、人種の競爭は益〻其度を高むべく、老國の分裂は一掬の涙を受けざらん、然り、强は彌〻暴威を逞ふし、弱をして益〻塗炭に苦しめ、尙ほ且つ欲する所は世界の平和なりといふ、吾れ其愚を嗤はざらんと欲して得ざるなり、それ唯愚なりと雖も、世界の大勢斯の如くんば、吾れ豈に默して可ならんや、乃ち時務に處するの經綸を建て、以て國家百年の大計を講ぜざるべからざる所以のもの實に茲に在つて存するなり。

我北海道の如き、北門の鎖鑰として魯國と相對峙し、其間僅に一葦帶水を隔つるのみ。帝國の爲には極めて重要なる位置を占む、單に軍備上より云ふも、速に拓殖の功を奏し、經費を本土に仰がずして以て兵力及經濟の獨立を期せざる可らず。況んや此地沃野千里、地積は優に六百餘萬の人口を容るべく、地味は正に二千萬石の米穀を產するに足り、鑛脈は無盡藏の石炭を產し、山林は無數の良材を出して以て內地の商工業を扶け、帝國無二の富源となるに於てをや。或人曰く現今の如き步調を以て進まば、北海道拓殖の完成せらるゝの日は將に明治七十一年にあらんとすと、嗟果して斯の如くんば、何ぞ其遲々たるの甚しきや。繁忙なる廿世紀の三十餘年は、實に十九世紀の一百年にも價せん。此に於てか北海道に對するあらゆる政策を究め、積極的の大方針を確定し、以て帝國の安寧福利を進めんことを勉むるの必要起る。

國家要素の一は國民なり。國民は個人の集合より成り、個人は敎育に依て治る。敎育にして完全ならざらんか、個人智識なし、個人にして智識無けんか國民振はず、國民

にして振はざらんか、國家は貧弱を免かれず。故に教育は實に國家を治むる所以の一なり。夫れ教育は恰も山林を造るに等しく、區々たる目前の小計を顧みることなく、悠然遙に永遠の收穫を期せざる可らず。殊に新開地の教育に至ては頗る忽諸に付すべからざるものあり。新開地たるや、進取の氣象に富み、磊落有爲なる青年の多數を見ると同時に、又天下各種浮浪無賴の徒の流集し來る塵埃場にして、一朝管理を怠らんか、汚習風を爲し、惡弊俗を造るに至らん。新開地教育の目的としてはかゝる弊害を未發に防がんが爲め、遍ねく普通教育を施し、或は新地の富源を開發し、國家の柱石として新地の情態を改進するに堪ふべき人材を養成せんが爲め、高等の教育を授くる大學を設備せざる可らず。二十餘年前、黑田伯が本道に札幌農學校を設立せし所以のもの、蓋し茲に見る所ありたればなり。人或は曰はく、普通教育の必要は則ち可なり、而かも高等教育の必要を說くに至りては、機の未た熟せざるを如何せん。如かず帝國大學の養成せる人材を誘ひ來りて、以て北海道の柱石たらしめんにはと、嗟是れ殖民の何たるを解せざる者の論なり。夫れ北海道の事業たる、何れも草創に屬し、其經營の困難なる實に內地人の豫想外に出づ、深く愛土の精神あり

て、百折不撓千挫不屈、以て事に當るに非ずんば奚ぞ克く其功を收む可けんや。此種の人材は之を他鄉の客、將に求む可らず。須く其土の設備にかゝる大學が養成したりし健男子ならざる可らず。何となれば後者は永く其土の新空氣を吸ひ、其土の山川氣候に慣れ、愛土の念、有爲の心、他に比して大なるものあればなり。且つ北海道は內地と頗る風土を異にするを以て、此地の開拓者を養成せんには、須く此地特有の學術を授くる大學の組織あらざる可らず。例へば牧畜學の如き、或は水產學の如き、或は殖民制度の如き、之を府縣に於て教授せんよりは、札幌に於て研究せしむるの利あるに加かず。又農學に於ても、本道は津輕海峽以南の農業を其儘採用すべからざるを以て、勢ひ本道に農業教育の機關を備へ、以て北海道的農學を授けざる可からず。若しも北海道にして高等教育を授くべき完全なる機關備はらざらんか、移住者は何を樂んでか子弟を携へて遠く此土に航せんや。見よ彼の魯國が西比利亞を治むるに際して、大學の必要を感じ、現にトムスク、イルクツク等に存立するものは、多數の教授と學生とを有し、盛に西比利亞拓殖の羅針盤として、文化の種子を播きつゝあるに非ずや。彼の米國は內地拓殖に於ては世界の龜鑑たるべき國なり。而し

て其爲す所を見るに、移住者來住して少しく數を爲すに至らば、則ち大學を新地に建設し、以て高等教育を移民に布かんとを勉むるに非ずや。現在合衆國に存在する各州の公私立大學(Universities and Colleges.)を合算せば、其數實に四百八十四校、在學及び卒業生七萬七千四百十五人、教官九千八百八十八人を以て註せらる。豈亦大なる數に非ずや、而して大學の數を以て現在人口七千六百四十萬を除すれば、大約十五萬八千人となる。即ち彼國にては十八萬七千の人口に對し一大學を有する計算なり。但し以上諸大學中には、課程低くして我國の高等學校に類するものもなきに非らざれど、兎に角此數を以て米國人が拓地殖民の一政策として大學の設立に重きを置く所以を知るべきなり。(大學の統計は、總て千九百〇一年發刊「ステーツマンス、イヤーブック」に據る。以下皆同し)

世界第一流の強國たる英國は、自ら其版圖内に日輪の沒するを知らざるまで、兩半球の各要所に屬國を有するものなり。而して其新地に殖民を爲すや、亦大學の設立に重きを置かざるはなし。彼れ英國は其本國に於て、既に九八「ユニヴァーシチー」十八「カレージ」を有し、千七百十三人の教官と、二萬五千三百十三人の學生あり。以て新開地に人材を輸出する機關は充分之を備へながら、而かも其殖民地に於ては、至る處大學の設備あらざるはなし。即ち英領印度に在ては、カルカッタ、マドラス、ボムベイ、パッヤブ、アラハバッド、等五所に各完全なる「ユニヴァーシチー」を有し、別に「カレーヂ」と稱するもの其數實に百六十九、學生殆と二萬を越ゆ。教官千六人。而して眇たるセイロン島の如きすら、尚ほ一個「ローヤル、カレージ」あるを見るなり。又西部亞非利加シーラ、レヲネと稱する殖民地は、面積僅かに四千方英里、人口七萬四千八百三十五人、此内白人二百二十四人を保つに過ぎずと雖も、尚「フォース、ベー、カレージ」と稱する高等教育機關を有し、以て着々拓殖の功を奏しつゝあるに非ずや。此他英國はクーブ、コロニーに於ては、一「ユニヴァーシチー」七「カレージ」あり、カナダには十六「ユニヴァーシチー」、二十四「カレージ」、南洋のニユー、ジーランドには、二「ユニヴァーシチー」、二「カレーヂ」あり。南濠洲には、一「ユニヴァーシチー」、二「カレージ」、南濠洲にはニユー、サウス、ウエールスには、一「ユニヴァーシチー」、二「カレージ」あり。ヴヰクトリヤには「メルボルン、ユニヴァーシチー」及若干の「カレージ」あり。此他佛國の如き、獨逸國の如き、其本國に其殖民地に許多の大學を有すること、猶英國の現狀の如し、嗚呼何ぞ其れ盛なるや。大國の基礎を永遠に建つる所以のも

の一に此に在るか。然りと雖も大學の設備は、獨り此等大國の專有する所にあらず國力の程度より論ずるも、又人口面積の數より云ふも、我帝國より遙に遜色あるの邦にして、而かも尙ほ大學の設備普きと、白耳義、西班牙の如きあり。彼の白耳義は四「ユニヴァーシチー」百十五「カレージ」を有し、西班牙は十「ユニヴァーシチー」及多くの「カレージ」を備へ、殖民地には各々高等敎育の機關あると、吾人敬服の外なし。彼の伊太利の如きは國力に於ては我と伯仲し、人口面積に於て共に我帝國の後にありながら、而かも二十一の有名なる「ユニヴァーシチー」を有し、敎官九百六十二人、學生二萬二千四百四十人あるに非ずや。國力微々として振はず、人口僅かに我の十分の一を保つに留り、列强國が齒牙にも掛けざる彼の瑞典國の如きすら、尙ほウプサラ及びルンドに二個の「ユニヴァーシチー」あり、一は千四百〇五人、他は五百八十五人の學生を有す。又諾威國の如き人口僅かに我の二十分の一に過ぎずと雖も、尙ほ學生千二百二十人を保てる一大學をクリスチアナ府に有せるに非ずや。殊に地積我が二分の二に充たず、人口其十分の一にして瑞西國が七個の「ユニヴァシチー」を有し七百〇八人の敎官の元に、三千九百九十二人の學生を敎育するを見ては、轉た欣羨の念に堪えざるなり。

顧て我帝國高等敎育の普及如何を見るに、官制に於て大學と稱し得べきもの、東京帝國大學、及び京都帝國大學の二あるのみ。我札幌農學校は程度に至ては大學の資格を具備すれども、未た他の分科大學あらざるの故を以て、「ユニヴァーシチー」と稱する事を得ず、又海軍大學校と云ひ、陸軍大學校と呼ぶも、「ユニヴァーシチー」には非ざるなり。若し我邦を以て支那、朝鮮に比する時は、我學政は大に誇稱するに足るべしと雖も、之を吾等が現在及び將來の大競爭者たる歐米諸國に比し來れば、何んぞ其軒輊の甚だしきや。東洋の盟主、世界の優等國を以て任ずる我帝國にして、如何ぞ斯くの如くなる可けんや。然りと雖も、此上我國の或地方に大學を設備するの必要なることは既に識者の間に定論あり。九州、東北の兩地を撰んで何れも大學を設立するの氣運を見んとするに至れるは、實に快事と稱せざるべからず、而して我北海道に於ても大學建設の急務たるを認むるを以て、札幌、小樽、函館の三區民は、曩に北海道帝國大學設立期成會を設立し、委員長をして左の請願書を携へ出京して、帝國議會に提出せしめ既に兩院の贊成を得たり。而して九州帝國大學、或は東北帝國大

學を先にせんか、或は北海道帝國大學を初めにせんかは、教育家及び政治家の熟慮を煩はすべく、吾人の敢て喋々を要せざる所なり。吾人は單に「ユニヴァーシチー」を起すに當り、此地の現狀に就き思考せざるべからざる主要なる三點を、左に掲げんとす。

(一)前説に論ぜる如く、北門の鎖鑰たる此新開地に於て、拓地殖民の實功を奏せんには、大學の設備最も必要なり。即ち農工其他諸業に關する技術者を養成し、本道繁榮の要素たる教育ある「シチズン」を出し、本道を經營管理する完全なる政治家を産し、恰も一家族をして自家を治めしむるが如くせしめんには、必ずや先づ大學を設立せざるべからず。

(二)札幌農學校は巨萬の基本財産を有し、十幾年の後には、優に經濟の獨立を期すべし。且つ完全なる設備と廣大なる敷地を有するのみならず、校舍改築の工、今將さに終りを告げむとす。斯る鞏固なる基礎を有する農舍を中核として漸次他分科大學を增加し、以て「ユニヴァーシチー」とせんは、經費に於て莫大の節減を得べく、又事業に於ても、更に頗る便利なるものあらん。

(三)東西を問はず古今を論ぜず、北方人種の强健慓悍ならざるはなきなり。北海道の地たる沃野千里に連り、至る所巨嶽大河あり。西比利亞の寒野より吹き來る颱風は、雪を飛ばし喬木を倒して以て健兒の躰を鍛ひ、北極より流れ來る氷山は、巖を碎き波濤に激して以て青年の神を練る。巨楡の森々たる、廣原の漠々たる、共に內地人の想像にだも及ばざる所、境遇の人物に及ぼす影響にして果して大なるものならしめば、此間に薫陶せらるゝものにして躰軀虛羸、薄志弱行なるは稀ならん。且つ北海道は四隣寂寞として、學生の誘惑に價するもの尠く、外に出てゝ交る所は獨り雄渾なる天然あるのみ。是れ北海道に大學を設立するの適當なる所以なり。

此三主因あり。以て論者は帝國に起るべき大學中、其一は北海道帝國大學なるを主張するなり。然らば我札幌農學校が「ユニヴァーシーチー」と化し去るは向後幾年にあるか、謂ふに多年を要せざるべし。而して各分科の如きは、本道の必要に應じて順次增科さるべければ、先づ工理科を起して現在の農科に加へ、醫、法、文科の如きは比較的後期に設立せらるゝならん。

北海道帝國大學設立の必要を論ず

今此論を閉つるに當り、吾人をして更に次の一言を加へ、而して本論の結尾たらしめよ。曰く教育の精神は須く世界的たらざるべからず、教育に黨派なく、又人種血族なし。教育に藩閥なく、又仇邦敵國なし。假令北海道拓殖上の政策よりして、北海道帝國大學を起すと雖も、教育家の精神に至ては獨り北海道と云はず、宜しく日本全國を裨益することを思はざる可からず、否又日本全國に止らず、汎く世界を教育し將來東西文明史に渺からざる影響を與へん事を覺悟せざる可らず。夫れ一國教育の中心は必しも其政治的中心と一致せず。米國第一流の大學は必しも華盛頓に在らずして、多くニューイングランド、ステーツに在り、英國第一流の大學は必しも龍動に在らずしてヨクスフォルド、クンブリッヂ、エチンバラーにあり。其他列强有名の大學は必しも其首府に在らずして、反て偏僻の地に多き所以のもの、教育の中心と政治の中心とは相一致するを要せざる、照々とし明かなり。吾人は信ず、我北海道は實に學問の地たり。未だ二十世紀の中葉に至らざるに、嵯然として頭角を顯はし、東洋の北極星と成り、學術の効果を遠近東西に頒與するの日あらんことを。嗚呼快なる哉。

增補三版 札幌農學校 終

哲學博士　文學博士　農學博士

新渡戸稲造先生著

○英文武士道　增補五版　正價金四拾五錢　全壹冊　郵税金四錢

○獨文武士道　訂正再版　正價金五拾五錢　全壹冊　郵税金六錢

新渡戸博士、學識淹博、東西に渉り、古今を貫き、而して其英文は、遒勁簡錬、僅に英米一流の文豪と轡を並べて馳騁するに足る、曩者博士の米國にありて、英文武士道を著し、之を公刊するや、名聲嘖々として北米大陸に傳はり、弊房に於て更に之を刻して、我が讀書社界に紹介するや、亦異常の喝采を以て歡迎せられ、發刊後未だ周歲ならざるに、忽ち壹萬五千部を售盡すに至る、各歳博士の獨逸伯林に遊ぶ、伯林の學者間、亦往々獨逸文を以て、武士道を譯せんことを勸説するものあり、エヲ、カウフマン氏、進みて其事に任じ、博士の校閲を請ふ、其業未だ卒へざるに、博士故ありて、歸朝の途に就かれしが、頃ろ閲漸く畢り、弊房に於て發刊するとなれり、カウフマン氏の譯が、博士の英文と相映して、如何に精妙なるかは、必ずしも多言を須ゐず……本書獨逸の新聞雜誌社に寄贈せしに、爭ふて其批評を揭げ、今回伯林の書籍會社より、數百部の注文ありし一事、これを證明するに餘りあるべし、

◎發行所　東京日本橋區大傳馬鹽町　裳華房

札幌農學校入學の栞

自東京
至札幌

旅行案内

否代

札幌農學の校風を慕ひ、北海の自然を愛し、決然札都に遊學を志すもの世に甚だ多し、而して其入學手續を知るもの亦稀なり、從て該地に至る道や遠く、若かも新開の土地なれば、旅に慣れぬ學生諸氏は其道中の心配一方ならぬを憂ひ、弊房即ち同校一學生に强ひて、其入學手續と旅行日記を借り受け、學藝會の許を得て、茲に併せ載するもとなしぬ、札都に至らんとして、未だ其道の詳細を知らざる諸氏の資料ともならば幸甚。

明治三十五年四月三日　　裝華房主人識す

附錄（其一）

札幌農學校入學志願者の栞

本校に於て本年募集する生徒應募者の爲めに入學志願心得となるべき事項及び參考となるべきものを掲くること左の如し

本年の募集

豫修科第一年級生徒四十名（豫修科第二年級は募集せず）土木工學科及び森林科第一年級生徒各三十名を募集す

入學志願者資格及び入學試驗程度

一中學校を卒業したる者は豫修科、土木工學科及び森林科第一年級へ無試驗入學を許す

二第一號の志願者各科の定員を超過するときは撰拔試驗を行ふ其科目は國語漢文（訓點、解釋、作文）數學（算術、代數、幾何（平面）、立體、三角術、初歩）英語（和文英譯、英文和譯）の三とす但し中學校長より優等生たる證明ある者無試驗入學を許す

三第一號の志願者定員に滿たさるときは之と同等の學力を有し品行方正年齡滿十七歲以上にして中學校卒業の程度に據り入學試驗を行ふ

試驗施行地　札幌本校、東京文部省內及各府縣(東京府を除く)中學校

出願期日　入學願書は六月二十日迄に入學手數料金貳圓を添へ本校に於て受驗せんとする者は本校へ東京に於て受驗せんとする者も同じく本校へ差出すべし

各府縣(東京を除く)中學校に於て受驗せんとする者は五月末日迄に該中學校に差出すべし

試驗期日　七月九日午前八時より施行の豫定但し確定の上は四月下旬又は五月上旬官報に掲け廣告す

札幌農學校

本科

本科は農理農藝及拓殖に關する高等敎育を授く

修業年限　四箇年

學年　九月十一日—翌年七月十日

學期　第一學期　九月十一日—十二月二十四日

第二學期　一月八日—三月三十一日

第三學期　四月八日—七月十日

入學程度　本校豫修科を卒業したる者

學科　農學總論　分析化學　植物營養論　土壤論　農具論　肥料論　土地改良論　普通作物論　特有作物論　園藝論　農產製造論　畜產學　家畜生理學及衛生學　家畜飼養論　獸醫學　養蠶論　昆蟲學　動物比較解剖學　動物生理學　動物發生學　植物組織學　隱化植物學　植物生理學　植物病理學　細菌學　農藝物理學　農用工學　森林學　水產學　經濟原論　農業經濟學　農政學　農史　殖民論　法學通論　英文學　獨逸語　農業實習　動物學實驗　植物學實驗　實科演習

卒業論文

實科　本科規定の課程中に就き之を專習するものゝ便宜を計り實科を設け第二年級の課程を修得したる者に之を課し第三年級及び第四年級午後の時

間を以て之に充つ現今は課目を分て左の六科となす

農學甲科　農學乙科　農業經濟學　農藝化學科　農用動物學科　植物病理

學科

學生定員　百六十名(各級四十名づゝ)

校費生及特待生　學生中學業優等品行方正なる者を選び校費生又は特待生となす校費生は十二人を以て定員とし授業料を免し學資として月額金七圓を給與す特待生は十五人を以て定員とし一學年間の授業料を免除す

研究生　本科卒業生にして既修の一學科を更に攻究せんと欲する者の爲めに研究科を設け主管教官之が指導の任に當る攻究期限は二箇年己内とし授業料を免除す

授業料　一學年金二十圓にして之を三分し毎學期の始に納む

學士稱號　本科を卒業したる者は農學士と稱するとを得

札幌農學校

豫修科

豫修科は本科の學科を修むるに必要なる普通學科を授く其修業年限を二箇年とす

學年及學期　本科に同し

入學程度　第一年級に入學することを得る者は

一中學校を卒業したる者

一第一號志願者の定員に滿たさるときは之と同等の學力を有し品行方正年齡滿十七歲以上にして入學試驗に合格したる者

一第一號志願者定員を超過するときは國語漢文英語數學に關する特別試驗に合格したる者

札幌農學校

學課

第一年級

倫理	人倫道德の要旨	
國語及漢文	講讀、文法、作文	同上
英語	講讀、飜譯、文法、作文	同上
獨乙語	講讀、飜譯、文法、作文	同上

第二年級

札幌農學校

歷史	近世史
數學	代數、三角法、方程式論、解析幾何
測量	平面及高低、測量實測、製圖
動物學	普通動物學
植物學	顯花植物形態及分類學
鑛物學及地質學	鑛物學及地質學
物理學	力學、物性論、音響學、熱學、光學、電氣學、磁氣學
化學	無機化學、有機化學
圖學	自在畫、用器畫
體操	兵式體操、兵式體操

生徒定員　八十人(各級四十人)

特待生　生徒中學力優等品行方正なる者を選んで特待生として一學年間の授業料を免除し定員は十人とす

授業料　一學年金十二圓之を三分し毎學期の始めに納む

札幌農學校

土木工學科

土木工學科は土木工學に關する教育を授く其修業年限を三箇年とす

入學程度　豫修科に同し

學科　英語、代數、幾何、三角法及解析幾何、微積分大意、物理學、化學、地質學、畫法、測量術、力學及圖式力學、建築材料、隧道、鐵道、道路、石工水利工學、器械工學、衛生工學、造家學、橋梁、土木法令及經濟、製圖及工事設計

生徒定員　九十人(各級三十人)

特待生定員　十二人　其待遇は豫修科に同し

授業料　一學年金十五圓之を三分し毎期の始に之を納む

貸費生　會社又は一私人の委託に應し學業優等品行方正にして學費支拂の途なき者を貸費生となすことあるへし貸費額は一學年金八十四圓已内とす(但下一私人にして貸費生を出願したる者一名とす)

學年學期　本科に同し

森林科

附錄　札幌農學校入學志願者の栞

森林科は林學に關する教育を授け其修業年限を三箇年とす

學年學期入學程度授業料並に生徒及特待生定員は土木工學科に同し

學　科　英語、代數、幾何、三角法及解析幾何、物理及氣象學、化學、地質及土壤學、森林動物學、森林植物學、農學測量術、圖書經濟學、森林數學、造林學、森林利用學、林產製造學、森林經理學、森林保護學、森林管理、狩獵術、林政學、財政學、法律學及森林法

給費生　學力優等品行方正なる者を選拔し給費生とす給費生は授業料を免し學資として一箇月金五圓を給す

定員は三十人以內とす

北海道廳給費生　卒業の後給與を受けたる年數に二倍の期間北海道廳長官の示命する職務に從事する契約をなす者は給費生を志願するを得給費生は一箇月金八圓を給す

定員は三十人以內とす

入學手續

本校に入學を出願せんとする者は左式の願書及び學業履歷書を差出すへし

（入學手數料豫修科土木工學科及び森林科は各金二圓）

（入學願書式）（用紙美濃紙）

入學願書

私儀今般御校豫修科（土木工學科又森林科）へ入學志願ニ付御許可相成度別紙履歷書並ニ入學手數料金二圓相添へ此段奉願候也

族籍
寄留
姓名印

年　月　日

何年何月生

札幌農學校長農學博士佐藤昌介殿

（學業履歷書式）（用紙美濃紙）

學業履歷書

一何年何月ヨリ何年何月マテ何地何學校ニ入リ又何某ニ就キ何學修業用書何々

一何年何月何學校ニ於テ何課程卒業(學校長ノ卒業證明書添附ヲ要ス)

一賞狀修業證書等ノ寫

修學者の便益

一札幌の地勢空濶山水秀靈心意をして清澄ならしめ志慮をして偉大ならしむ

一空氣清爽飲料水清良最も衛生に適す

一寒氣は想像の如く甚しからす歐米大都と緯度を同ふす潛心學を研鑽するには温暖の地に優る

一學生生計費低廉本科學生一箇月の經費凡十圓乃至十五圓他科生徒は之に準して低減するを得

附記

本校規則を要する者は札幌農學校宛郵券二錢封入申込まるべし

明治三十五年四月

附錄（其二）

上野より、小山まで。

故郷を辭してより早や旬日、都の叔父の、食客となり、名たゝる公園あるは、建物大方見盡したり、九月八日、日鐵、起點上野に至る、赤帽の數凡そ三十、昨夜叔母の話に聞きしは是れなんめり、手荷物一個の周旋料僅かに二錢、兎角面倒がる我なれば、旅行不案内なる名のもとに、綿入、羽織、書籍など、我財産は殘らず彼れに任せてチツクトと交換しぬ、青森迄の賃金五圓六十九錢なれど、割引券にて二割を儲けたり。

午前九時、長蛇の如き汽車動き初めぬ、オーイ〳〵と呼ふ人無し、流石は都なりけり瞬く隙に、田端につきぬ、停車場前の岡丘は道灌山なり、花見寺、興樂寺は共に數町の内にありといふ、常磐線へは此處より乘り換ふるなり。

右窓より見ゆるは王子製紙會社の赤煉瓦、雲かとまがふ黑煙、飛鳥山の花も時節が秋なれば匂りも無く、滝の川の紅葉も未た早し、西ヶ原農事試驗場も近きにありと、八字髯の乘客深切ぶりに指しぬ、纏て赤羽に着きぬ、甲州より來る人、東海道より、東京に出でず品川より乘換へたる人、皆此所に集まる、三十餘分の時間はあれど、川口

町の桃林へ二十町と聞きては、行く氣にもならず、荒川の鐵橋を越え、蕨を過きて、浦和に至る關東平原とは是れなるらんも、石狩のそれと比すべくもあらず、之を譬ふれば、甲は當世人の小さき手にてなしたる庭細工の如く、乙は自然のたくみが成し給ひし大公園なるべし、梅林の名ある氷川神社は森に隱れて見えねと、しるしの鳥居を右に見て、大宮に着きぬ、中仙道行と別れぬ、蓬田をすぎ久喜にて東武線と合し、利根川の鐵橋に數ふれば、上る、下るの白帆兩手に餘れり、舟子か舟唄、聞えざるはうらめしき、夕ぐれの景なと思ひやりつゝ、靜御前の墓ある栗橋、頼政の墓ある古河、及び間々田を經て小山に至る水戸線兩毛線と合してクロスを作る、プラットフォームのベンチに石地藏の如く並べる旅客、辨當屋、茶屋、菓子屋、中々大したものなり、信越地方よりの旅人は、昨夜高崎に宿りしなるべし、時は正午迄半時間もあれど、此所にて中食す、上等の辨當、一個二十錢、例の茶道具一式、僅かに三錢五厘。

小山より、仙臺まで。

小山を出て小金井、紬の產地結城、石橋、雀宮を經て宇都宮に至る日光行きは乘換へといふ、中々の賑ひなり、未た結構といふ資格なきわれなれど、急く旅なれば遊山も出來ず、神田にて求めし三文雜誌も見飽きたり、徒然のまゝに、此地の新聞紙を購ふ、塲所が塲所とて蠶業機業の記事のみ多くして、旅の慰めにもならず、昨夜十二時迄の長話に疲れたれば、乘客の邪魔にならぬ樣にとまだ發車せざるに、赤毛布頭からかむりて、ベンチの隅に丸くなりぬ、暫くして目を開けば、岡本、寶積寺、氏家、片岡、矢板、野崎などは、夢の間にして、身は既に西那須野につきけり、鹽原溫泉へ西北五里半と、墨太に書かれたる廣告を見て、乙羽の壺原越(千山萬水の一節)なと想出しぬ、昔待塲の面影を殘すか、たゞ見る薄、女郎花さては桔梗など秋草のかづ〳〵咲き亂れたる野分の風に折られなる果てそと、いへとも聞けるや如何に。

東那須野、黑磯、黑田原、豐原の邊も、見所なきにあらず、那須七湯、殺生石、國造の碑、あるは黑田原の溫泉塲など、四五里の內にあり、箒川にて過ぎし年の大慘狀も思ひやられて淋びし。

白河にては、城跡を左に一本松の上に月のかゝれるを見たり、去年の旅などより、遠くは戊辰の昔をも、聯想して、いふべからざる思に入りぬ、其昔、さる法師が「都をば霞と共にいでしかど……」と詠ぜし白川の關趾は、此處を距る一里計りなり、われもせ

めて一句を唸り、此開けたる御代のさまを告げなく思ふうち、汽車は既に泉崎、矢吹を經て、須賀川につきぬ。牡丹園、旭ヶ岡の公園まで、各廿五町、郡山にて岩越線と合す、若松を午後の二時に立ちし人は、此汽車に乘りたるべし、日和田より二本松に至る、こゝも古戰場なれど城跡見えねば、白河にて起りし野心は出でず、安達ヶ原の黑塚、岩角、毘沙門、岳の温泉など、閑人の遊ぶべき處は此驛より降車するなり、松川を經て、福島に至る、時は六時を過ぎて、日は西山に落ちかゝりぬ。

汽車嫌の人は、今夜の宿を此處にとるも可なり、金藤、松葉館、福島ホテルなど中々親切なり今より四年前、われ此地方を旅して飯坂の温泉に遊びたるとありき、福島より二里半、荊髪川の水清うして砂白く、愛宕山は蒼きが上に蒼く、旅の心も忘られたり、河原左大臣の陸奥の信夫山も近し、辨當は、十五錢、山のもの多くして海のもの少なし、長岡、桑折、藤田、越河、白石、大河原、槻木など眼を大にするの要なし、夜汽車客は僅か五六人横になり、縱になるも、此時のみ岩沼にて水戸線と合し、增田、長町を經て、仙臺に入る、夜九時、上野を出でて、丁度十二時間、降りて宿るも可ならむ、太年山の靈廟、躑躅ヶ岡、青葉神社、櫻ヶ岡公園、瑞鳳寺、芭蕉ノ辻、林子平又は政岡の墓等、見るべきもの多し、仙臺ホテル、陸奥ホテル、針久、安藤など宏麗なる旅宿少なからず、疲れたる眼には新聞屋、菓子屋、茶屋、辨當屋、烟草屋、驛夫、乘る人、降る人、皆うるさし。

仙臺より、青森まで。

九時過ぎて二十分、仙臺を發し、岩切に至る、多賀の城跡、末の松山など、近きにあり、鹽釜行と分る、千賀の浦より松島を見む人は、此所よりすべし、松島よりするも亦可なり、鹿島臺、小牛田、瀨峰、新田、石越、花泉、一ノ關、平泉、前澤、水澤、金崎、黑澤尻、花卷、石鳥谷、日結、矢幅の十五驛は、全く闇の内に過ぎたれども、去年の旅に福島に宿したれば、此邊は眞日中のとて、彼方此方の丘岡に、放馬、群れ居て、嘶くあり、又レールの上に遊ぶあり、汽車に礫かれたる話など聞きて、さもあらむと思ひぬ、衣川の柵、芭蕉翁の碑などの名所は平泉より近し。

盛岡にて、驛夫に呼ばれ、切符を調べられたり、さのみ間拔ヶのわれならなくに、時に九日午前二時半、好摩、川口、沼宮内、中山をすぎ、小鳥谷に着し頃、東雲の空、やゝ明らみぬ、一ノ戸にて楊子を用ゆ、水晶澤の名所、福岡、三ノ戸、劍吉を經、尻内にて二十錢の辨當も殆んど二十時間搖られたる腹の、中々滿さるべくもあらず、下田、古間木、沼崎、乙

供に至る頃、東の方太平洋の藍色も見え、野邊地にて、左に見るは夏泊岬なり、一帶の水を隔てゝ、恐山を望む景は、水に緣なき此汽車旅行者の、喜んで迎ふる所なり、狩場澤、小湊温泉場の淺蟲もはや通りぬけ、十時二十分、青森につきぬ。

室蘭通の船は十一時の出帆、中々忙がしければ、荷物は一切番頭に預けぬ、「かぎや」と云ふに小憩す、船の飯は美ならず、まゝよと五十錢の中食を注文しぬ、出帆は間近し、二日目の味噌汁も碌々味ふ暇なし、船賃二圓十錢なれど一割五分の割引あり、解代十錢を拂ふて船に乘れば、わが財産は安全にも、隅に置かれたり。

津輕海峽

肥後丸といふ一千餘噸の定期船、三等室はもとより奇麗ならず、されども滊車よりは樂なり、二拾四時振られ通しても、海より陸を見る景は、捨て難ければ甲板を逍遙しぬ、やがて汽笛鳴りて、赤煉瓦の建物綠の山、次第に遠かりぬ、試に我が行く先は何處なるらむ、如何なる處なるらむか考へよ、北海道なり、金の湧く地なりと思ふは、大なる誤なり、然らばいづこ、曰く北の樂園、いかなる所、曰くエルムの茂れる所、其外なにもなし、今なり我心を洗ふとき、いざ此海峽の風に身を清めむか。

三文雜誌も見終へぬ、青森港を出てゝより早や三時間、船は漸く搖れそめぬ、目まひせざるにもあらず、函館へは五時に着くべきも、海上は思ふかまゝにもならず、霧深くして定刻よりも凡半時間遲れて、錨を投げぬ、げに巴港の名に背かず、砲臺のある臥牛山から五陵廓に至る、黑き森、山腹を街とせる幾千の白堊幾千の大船、小船、林の如しといふよりも、尙ほ適當なる形容詞を與へたし、夜に入りては船の燈火は星の如く、商家のそれは、山を燒くが如し、三時間の碇泊なれば、往復四十錢を投じて、夕食を求めん爲め、上陸する客もあり、われは鹽氣ある辨當に滿足し、影細きカンテラの下に、毛布に包まりて、足を伸しぬ、夕風寒し。

汽笛に呼ばれて起き上れば室蘭港に近つきしなりけり、絵鞆崎より連なる山々、海黑く、大黑島の燈臺、其光、今やアローラの神前に平伏したるが如く見ゆ、宿引なる赤帽の一群、矢の如く舟漕きよせぬ、行季は彼の一人に預けたれば、心配はなし、ガラスの如き、水の上を渡りて、波止場に達しぬ、坂多き町とて馬車に塔じ停車場前の㊀蜷子旅店に至る、(浮船賃と馬車代合して三十錢)

發車迄二時間計りあれば、湯を御召しといふ二日二夜帶をとかぬ身の、朝湯と來て

は捨てられず、鮪の指身に舌打ちならし、手宮行とかきたる列車に乘りぬ、荷物は一切宿屋に任せたり、飯料五十錢、札幌迄の乘車切符二割引にて壹圓五十貳錢。

室蘭より、札幌まで。

七時室蘭を發す、輪西山のトンネルを拔け、輪西よりカルルス溫泉の幌別を經て登別に至る、登別溫泉は二里に近し、登別山麓に在り、風景頗る佳と、嘗て漢語の癖ある友人某の御土產談のありしなど、思起して獨り吹き出しぬ、アイヌのなせる草小屋の見ゆるなど、旅に慰め盡きざる所なりけり。

敷生、白老、錦多峰、苫小牧までは、右の方より潮風の吹きていはん方なく、左は一垣の泥炭厨、高さ六尺にもあまる雜草の上に、尙ほも拔きいでゝ、女郎花の蝦夷の秋草を代表顏に露をあび、日をうくるさま、あるは薄のやさしげなる、撫子の愛くるしき、あるは桔梗、尾花、山萩、ぎぼし、やなきたんぽゝ、紫なる黃なる紅き白き入れ亂れて、一々しるさむは其みちならぬ、われにはうるさし、一昨日那須野原に「秋風に吹かれな折れそ」の捨て言葉も、今此秋の神の遊ひ給ふ、大花園に來ては、我なから其拙かりしを耻づるばかり、殊に六月故山に歸る時、美しく咲きける白花の姫百合（ヤマユリ、オブ、セ、ヴァレー）も、今は首

うなだれて、世をかこつさま見ては、わが栖む宿に伴はんかと思ふ、されどせんなし。」

苫小牧は札幌より十七里、室蘭との中央にして國道は三叉をなし、東は百三十里にして根室にいたる、レールは左に折れ鶴の狩場、沼の端より早來に至る千歲の廢化場は四里の山奧なり、しばし車窓より首つき出し目も遙かに眺むれば、みづなら、やちだも、など茂り生ひ、しらかんば、どろ、は殊に目立ちて見ゆ、其下蔭に春は福壽草も笑ふべく、夏はたんぽゝも馨るべし、何れ蝦夷の島とはいへ、遠き山、近き林、雲の行きかい、繪たくみならぬわれも、美の神の住居もこゝならめと感じぬ。

やがて追分につきぬ夕張線と分る三河より由仁に至る此邊水田廣く、木道の水田のタイプなりとて、毎年俯學旅行地の一なりとす、栗山は炭礦鐵道會社の伐木場あり、造林の業盛にして、北淸地方に輸出する、スリッパーの產地なり、淸眞布にてインナショナル、オイルコアンバニーの試驗場を右に見て、岩見澤に至る、クロッスの線路、上川地方に行く人、幌內太幾春別の炭山に行く人、皆此所を起點とす、されば中々の雜沓なり、此地石狩平野の中央なれば、倉庫に積める菰包山の如し、かゝる繁華の地なれども飲用水とすべきものなしとて、態々札幌より運搬するとのこと、中々厄介な

り札幌迄もう一時間餘もあれば、辨當を命ず、二十錢、茶道具は小山に求めし時より四錢も高し。

幌向に出づ、右に見ゆるは石狩川なり、利根の如き景は見えず、江別は江別川の石狩川に注ぐの地名物の御饅頭屋、賣聲高し、野幌、厚別の邊、皆拓かれて麥圃稻田となる、をちこちに見ゆる家の午炊、げに大御代のあり難きためしなり、煉瓦製造場の家根、製糖會社のルイノ、葡萄園の綠を、迎えつ送りつ、札幌につきしは十日午後一時四十分、宿引亦帽うるさし、十錢を投じ腕車を走らして寄宿舍に入る、同窓二十名、既にあり、食堂の話は長くして盡きず、縱覽室の二次會、夜十一時に至る。（刈南）

横濱より小樽

旅に慣れず先きを急かぬ人は横濱より船によるを便利となすべきか、其船賃は三等六圓、二等十二圓なり、荷物の如きは餘程多くとも咎かめらるゝとなく、皆手荷物として通るべし、横濱出帆して翌日は荻の濱に寄泊す、其間上陸して湯に入り食を命するの暇あり、斯くて再ひ出帆し、翌日は、函館に投錨すべし、一晝夜の碇泊なれば

上陸し、叉勝田旅店、若くは井旅店に宿るも可なり、翌日の出帆を待ち兼ぬる者は、始め横濱より函館に至る切符（三圓五十錢）を求め函館に着すると、更に其夕の室蘭行きに乘船せば、一日早く着札す、去れとも旅慣れぬ人は眞直に其翌日をまち小樽に向くをよしとす、小樽に投錨すれば北地行處も同じく宿引來り迎ふ、越中屋か、井に命して、凡ての荷物を托し、更らに意とせず其の宿に行きて船の疲を癒やすべし、然れど札幌に至るを急くものは、汽車の發車時を直に尋ね小樽停車場に走せ乘車せざる可らず、朝里より錢函に至る間は左に海を抱き、右に山を負ひ、風色言はん方なく、神居古潭殊に絕景を推すべし輕川、琴似を經て漸く、札幌に近かんとすれば測候所のあたりより、鬱蒼たるエルムの茂りの間に、白堊の洋館隱見すべし、是れぞ札幌農學校新築校舍なり、札幌に着すれば知人の迎ふものなき時は、山形屋、旭館、⑦などの宿引に荷物を托し案內せしめて宿るべし。

海路を記せる此の項は、日記にあらざれとも、便宜に記せるものなり、今は海陸二路の旅費を概算して左に示す。

陸路　十一圓二十八錢

海路　十　圓

但し海よりせるものは三等客となり、荻の濱に上陸し、函館にては旅館に一夜を明し、小樽に來りては旅店に中飯を喫したる概算なり、若し荻の濱には上陸せず、函館に上陸するも船に歸りて泊れば二圓を減して可なりとす、又た陸路のものは割引を應用せざる計算と知るべし。

自東京至札幌

旅行案內 終

明治三十一年六月廿三日印刷
明治三十一年六月廿六日發行
明治三十二年五月十九日再版
明治三十五年四月十一日三版

札幌農學校學藝會藏版

札幌農學校奧附

正價金四拾錢
郵稅金六錢

東京市日本橋區大傳馬鹽町十一番地
編輯代表者　芳野兵作

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地
印刷者　青木弘

發行所　東京市日本橋區大傳馬鹽町十一番地　冀華房
特約所　大阪市東區備後町四丁目　吉岡平助
特約所　尾張名古屋市本町三丁目　川瀨代助
印刷所　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地　株式會社秀英舍

賣捌各書肆

東京日本橋區通三丁目	丸善書店
東京日本橋區通三丁目	林平次郎店
東京神田區表神保町	中西書房
東京麻布區本村町	東京書店
東京赤坂區青山南町五丁目	學農社雜誌局
東京牛込區早稻田下戸塚	山陽堂書房
京都市上京區寺町通二條上	早稻田屋一郎園
京都市上京區河原町二條南	若林書舖
熊本縣熊本市新町二丁目	大黑屋茂次郎店
鹿兒島縣鹿兒島市中町	長田幸治書店
福岡縣久留米市米屋町	吉崎兵衛
大分縣大分町竹町	長竹斐書店
石川縣加賀小松町	菊田一郎
長野縣長野市大門通り前	甲斐平太郎
長野縣信州松本町本町	宇源次郎
千葉縣千葉町本町三丁目	西宮支店
宮城縣仙臺市南材木町	水喜書店
秋田縣秋田市茶町菊ノ丁	多賀太郎
北海道札幌南一條西三丁目	佐藤兵衛
北海道札幌南一條西二丁目	成田琴次郎
	進澤清
	富都政
	貴振見堂

東京

裳華房

203587-000-1

FB22-123

札幌農学校

札幌農学校学芸会／編

M35

EDM-0113